

2019年11月24日(日) 近畿旧友会ハイキングクラブ「<sup>さんぽかい</sup>燦歩会」例会(第486回)

## 京都一周トレイル・第3回 蹴上～大文字山～銀閣寺まで

近畿旧友会「燦歩会」では、2017年から9年計画で京都一周トレイル全80キロ走破に挑んでいます。初年度は伏見桃山駅から伏見稲荷大社までの10キロ、昨年度は伏見稲荷山から清水山を経て蹴上までの約10キロ、そして3回目となる今年は、蹴上から大文字山を通って銀閣寺までの8キロを歩きました。行程の標高差は約400メートル。ふだん街歩きが多い燦歩会にとっては、なかなかの「登山」コースでした。

午前9時30分、京都市営地下鉄東山駅に集合。今回は途中離脱ができない「健脚指定」としたため参加は12名(男性8名、女性4名)と通常の半分程度でした。

東山駅からまずは栗田神社まで歩き、そこで恒例の準備体操。境内の紅葉が見事でした。通常は完歩後に撮る集合写真も栗田神社で撮りました。



集合写真のあと、蹴上のインクラインへ。インクラインとは傾斜鉄道のこと。滋賀と京都を結ぶ琵琶湖疏水はトンネルを抜けた蹴上と麓の南禅寺との高低差が30数メートルあり、そのままでは船で行き来できません。そこで傾斜のついたレールを敷き、台車に舟を載せて運んだのです。全長582m、1890年代(明治中期)に作られ、1948年(昭和23年)頃まで使われたそう。今でもレールが残されています。

そのレールの上を歩いて日向大神宮(ひむかいだいじんぐう)へ向かいました。(写真下左)



日向大神宮はその昔は「京の伊勢」として伊勢神宮への代参に多数の参拝者が訪れ、また東海道を往来する旅人たちの道中の安全祈願の宮だったそうです。

境内には「十月桜」がまだ残っていました。期せずして紅葉と桜を拝むことができました。(写真上中)

日向大神宮からいよいよ本格的な山道になります。コースの標識の番号を確認しながら登っていきます。トレイルコース道はよく整備されていて歩きやすかったのですが、ところどころまだ去年の台風の傷跡も残っていました。途中、山の反対側(山科方向)を臨めるポイントもありましたが、ちょっと霞かかっている振り返ることもなく・・・(写真前頁右)

安全第一の燦歩会ですので、後ろから来る人に道を譲りながら2時間かけ、ゆっくりゆっくり登って行きました。結果一人の脱落者もなく、12時10分無事全員標高465.4メートルの大文字山頂上に到着。

ここで昼食。まあ頂上はすごい人でした。(写真下左)



12時40分、昼食を済ませて、ここからは銀閣寺に向けての下り。じつは登りより過酷、強制的に歩かされている感じで、転ばないように、滑らないように、細心の注意を払いながらの下山です。(写真上中・右)

下ること20分、13時に五山送り火の火床に到着。この標高は300m位ですが、すばらしい眺望です。



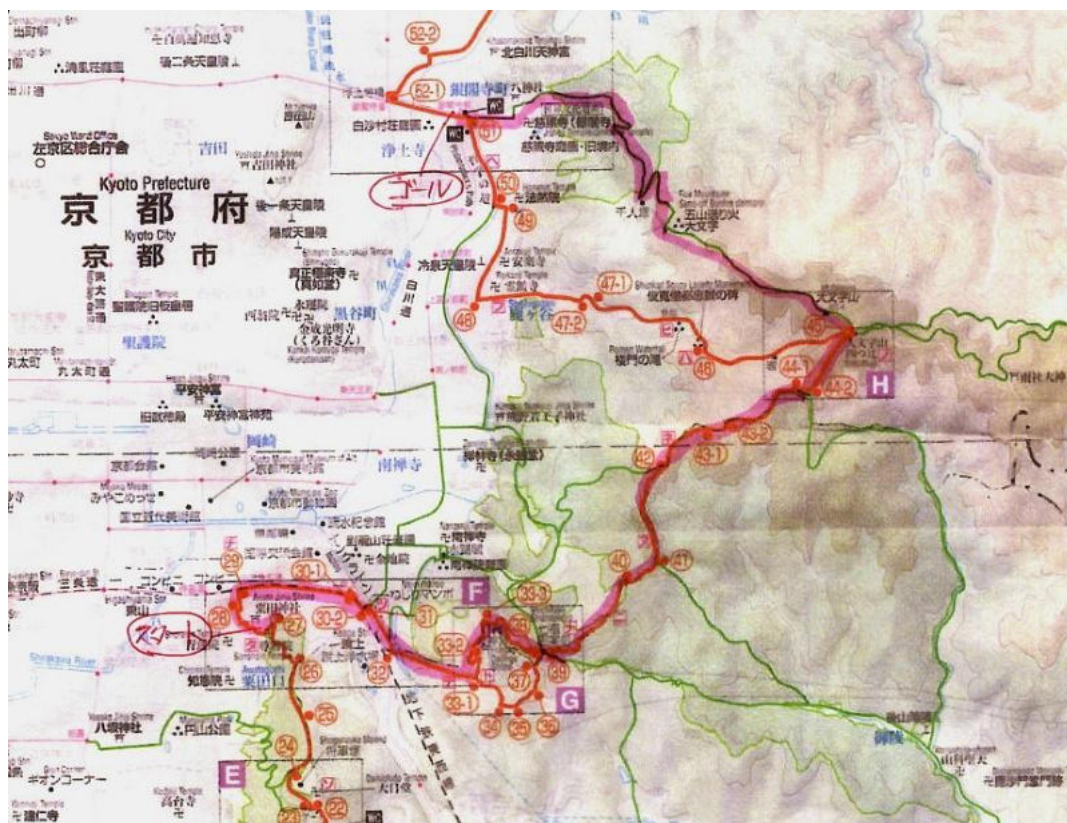
五山の送り火は毎年8月16日夜に、京都盆地を囲む5つの山(東山如意ヶ嶽、松ヶ崎西山・東山、西賀茂山、大北山、曼荼羅山)に五つの文字や形(大、妙・法、舟形、左大文字、鳥居形)が浮かび上がる、京都の夏の風物詩として有名ですね。大文字山はその名のとおり“大”の字を描きだします。

じっさいその火床を目の前にしてその大きさに圧倒されました。大の字の1画、2画、3画の交わる中心点にある火床は「金尾(かなわ)」と呼ばれる特に大きな点火台で、送り火の時はここから最初の火が付けられます。(写真上右)

送り火の火床を過ぎて、あとは黄葉の中を銀閣寺に向かってたんたんと坂を下ります。この道はハイカー、家族連れ、カップル、外国人と大変な賑わいで、燦歩会メンバーも他のハイキンググループと混じりながらの下山となりました。

14 時、バラバラになりながらも全員ゴールの銀閣寺門前に到着。心配された雨に降られることもなく、気持ちよく完歩できました。あとは明日(明後日?)の筋肉痛に備えるだけです。

### 今回のコース



### ◇燦歩会では旧友会、職員のみなさまの新規入会をお待ちしています◇

入念な下見を行い、中途離脱も可能なルートを設定して、毎月第4日曜日に歩いています。メンバーはおよそ50名、その日の都合と体調に合わせて自由参加です。(事前に予約が必要な場合もあります)

○今後の予定は

- 12月15日(日) 納会(大阪)
- 2020年1月26日(日) ちんちん電車に乗って住吉さんから堺の街を歩く(大阪)
- 2月23日(日) 西行入寂の弘川寺と富田林寺内町を散策(大阪)
- 3月22日(日) 華岡青洲の里と粉河寺を訪ねる(和歌山) \*青春18切符利用

参加ご希望の方は、会務担当山村恵一にご連絡下さい。(電話 090-1484-4403)

一緒に気軽に楽しく歩きましょう!

(写真・文 種田敦志)